



与えられた環境で結果を出すこと 培われた行動力を市政に活かして

宮本 敬介さん 金沢市文化スポーツ局文化政策課主査
Keisuke Miyamoto

何もない過酷な環境で、出来ない言い訳を考えるのは簡単だ。

しかし、どんな環境においても目標の達成を信じ、工夫を凝らせば活路は見いだせるもの。

協力隊の2年間で体得したアグレッシブな行動力は、市政の発展に大きく役立っている。

世界の貧しい子どもたちを 支援したい

20歳から27歳までにかけて、世界50カ国を渡り歩いてきた宮本さん。異文化に触れながら頻りに目にするようになったのは、貧困が及ぼす格差社会だったという。「中東では貧しくて学校に行けない子どもたちに、アジアでは路上



生活している子どもたちに出会い、胸が痛みました。少しでもこうした子どもたちの手助けが出来ないかと考え、青年海外協力隊への参加を決意しました」

27歳の時に金沢市役所へ就職。多忙な日々を過ごす中でも夢をあきらまなかった宮本さんは、行政職員の「自己啓発休業」を活用。金沢市役所では初となる、職場に籍をおいたまま協力隊参加する「現職参加」を実現させた。

人間本来の持っている“力”を 引き出すことが役目

派遣されたのはアフリカのケニア。村落開発普及員として、キリフィ県のジェンダー社会開発事務所を拠点に、コミュ

ニティグループのマイクロファイナンス（貧困層に対する少額無担保融資）返済支援活動を担当することになった。しかし、現地ではオートバイが使用禁止であるため活動が制限。遠くに行けないなら近くで出来ることをしよう、そんな発想の転換により、あらためて近隣住民の低収入の実態と生活の厳しさを認識し、収入向上と生活改善を繋げる活動を始める。

ある学校では机や椅子がないため、住民から宮本さんに机などを寄付してほしいと要請された。宮本さんは「自分にはお金はないが、皆が何かを作ってそれを売り、その代金で机や椅子などを購入することならいくらでも協力できる」と伝え、貝殻のネックレスづくりに



市民のニーズを吸い上げて作り上げた「いしかわ・金沢 風と緑の楽都音楽祭」。魅力的なプログラムに、今では日本中からファンが駆けつける。



約300名の留学生が参加する「JAPAN TENT」。ホストファミリーや大学生たちのコーディネーター役としても奔走する。



「世界に目を向けるきっかけになれば」そんな思いから「JAPAN TENT」では協力隊OBらとワークショップを開催したところ、参加者イチ押しの人気企画に。

挑戦。近くの海辺で貝殻を拾い、漂白剤で汚れをとり、ニスで光沢を出すなど、商品価値を高めるアドバイスをした。結果、ネックレス販売は好調に進み、機をはじめ黒板、椅子20個以上を購入して教育環境を整えることができた。

また、薪拾いなどの手伝いで学校に行けない子どもたちが多くいたため、改良かまどの普及を展開。従来の三つ石かまどに比べて改良かまどは熱効率がよく、薪が少なくて済み、結果として薪拾いの時間が4時間から2時間に半減し、子どもたちは学校に行けるようになった。『援助』とは物を与える



宮本さんへの エール!

金沢市文化スポーツ局
文化政策課 課長
新保 博之さん